



ぶつかり合ふことなく生きて雛納
線刻に色を嵌めゆく雛道具
彫像の背面未完三月来
本に指はさみて寝落つ朧月
黄梅や水は傷つくこともなく
デッサンの先づは左手鳥交む
蝌蚪の歌るるるると身を振ひ
初蝶や手作り句集製本中

浅春やサインをぎゅつと胸に抱き
三・一一肩先は魂乗る所
三・一一翼なく蹄なく
三・一一あの日そして絶句

俳句碎々

金子兜太は岡井隆との共著『短詩型文学論』（紀伊國屋新書 一九六三年刊）において、「蛇」という語が俳句の中でのような表出機能の変化をたどったかを考察している。

この空を蛇ひつさげて雉子とぶと 高野 素十
この句は蛇を描写している。蛇は蛇という物体である。

蛇を捨てつさらに遠くの水に捨てつ 軽部鳥頭子
この句では、蛇に対する嫌悪感を土台にして、心理のはたらきを、遠くへ捨てるという動作に托して詠んでいる。

蛇よぎる戦にあれしわがまなこ 富澤赤黄男
戦闘に荒れた自己の心を過ぎゆく暗い影を、蛇によって表そうとしている。そのことに、作者の態度は意識的である。

小林貴子 音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢 赤尾 兜子

作者の危機意識が表出されている。蛇は本来の具体性を解消し、「蛇の飢」という完全な暗喩としてはたらいっている。以上、兜太の論は分った。そこで、我々「岳」はどうか。

蛇の名を呼んで餌を撒く湖国かな 宮坂 静生
これは実景であろうか。犬の名を呼んで餌をやるなら実景だが、蛇だと言われると、ある種の幻想性がそこにまつわりつく。その場が〈湖国〉、琵琶湖の北辺あたりと思うと、具体的な地貌が見えてくる。具体とも幻想とも鑑賞し得る、その間に、地貌の裏打がある。同時にどことなく人懐っこさがある。これが、先人の「蛇」と比較した時、宮坂静生俳句の特色として浮び上がってくる面ではないだろうか。